

## 全日自労の“じかたび”中心の学習活動の進展

明 神 勲

全日本自由労働組合（全日自労）は、中央機関紙のもつ「宣伝者、組織者、教育者」としての機能を正しく評価し、機関紙活動をテコに組合の民主化と階級的強化という巨大な実験にとりくんできた数少ない組合である。ここにおける機関紙活動は中央機関紙「じかたび」中心の組合活動、教宣活動は大衆的階級的学習運動の確立という点で戦前戦後の労働組合の教宣史上一つの里程碑を築いたと評価できるものである。

ここでは北海道におけるその展開を概略する。

### 一 運動展開の背景

一九四九年、日本独占資本の急速な復活と日本を「極東の軍事工場」化することをねらいとして米占領軍は「経済九原則」を指令し国鉄をはじめとする一〇〇万人におよぶ大量解雇が実施された。この対応策として緊急失対法を制定し失業対策事業が開始さ

れた。「ニコヨン」と嘲笑された苛酷な低賃金、無権利の中で失対労働者はレッドパージにより職場を追放された戦斗的労働者を指導者として組合を結成し、他の労働組合からさえ蔑視、嘲笑をうけつつも身をすり寄せ自らの力で闘い、賃金、手当での改善をすすめてきた。雑多の意識をもつ老人と婦人を構成員とするこの組合は、イギリスにおける一九世紀後半のイースト・エンドの労働者がそうであったように「粗野で、無視され、労働者階級中の貴族から軽蔑されていた」（エンゲルス『労働者階級の状態』の一八九二年ドイツ語版への序言）マルクス・エンゲルス全集、②P六七八、大月書店）存在から一九五〇年代後半にはようやく一般就労者組合に仲間入りをしその実力によって認められる存在へと成長し「よどんだ水たまり」の中で「こびりついた絶望をばらいおとし」（同書）はじめた。

しかしながら、一九六〇年を前後して始まる雇用政策の変化は

「構造政策」に示される大量の失業、半失業の人為的、暴力的創出とその強権的移動、配置（独占とその系列の中小企業に若年労働力を確保し、中高年労働力と入れかえ、後者を中小零細企業に配置）を主たる内容とする「労働力流動化」政策の登場は失業対策事業に対する位置づけの変化を迫るものであった。この政策遂行上失対事業の存続は障害になりつつあった。一つは組合の斗争により年々賃金、労働条件の改善が行われ、見本の低賃金、無権利の最低線を除々におしあげ始めたことであり、二つには失業保険と並んで失対事業の存在は創出された過剰人口の強制的再配置にブレーキをかける要因になるからである。一九六二年、福永労働大臣構想として発表され翌年七月強行採決された「失対法、職安法改正案」は失対への新規登録を認めず現在の失対を失業者就労事業と高令者等事業に二分化し、前者を小零細企業や粗夫、臨時工として追いだし、後者をなしくず的に減少し、全面的に失対を打切ることを目論むものであった。

失対労働者は自らの死活にかかるきびしい政策の舞台に立たされることになった。「改正案」発表の直前、全日自労は第一七回定期大会において「全日自労綱領」の採択を行った。「失業と貧乏をなくすために」のタイトルをもつ綱領（「失反綱領」と呼ばれている）は、十数年の斗いの上にたち「盆暮組合、失対一族」と呼ばれる組合から、(一)完全雇用、雇用拡大、定職につけよの要求、(二)最低生活保障の要求（大巾賃上げ、最低賃金制確立、生活保護規準引上げ）、(三)社会保障確立の要求、(四)平和、独立、民主主義の要求の実現を目標とし、統一行動と統一戦線、組合民

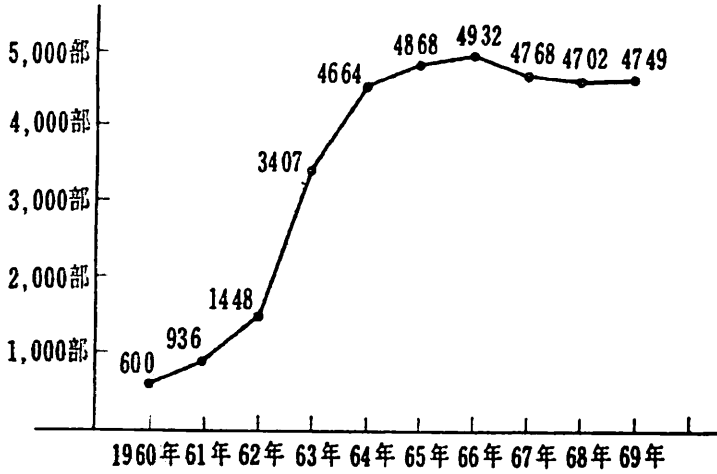
民主主義の徹底をつうじ「階級的民主的労働組合」への質的転換を規定し、その後の運動の基本路線を決定づけたものであった。

第二九回中央委員会はこの綱領にもとづき「失対打切りを粉碎するため組合運動の姿勢を根本的に転換させる必要がある」として、(1)現場を基礎にする組合運動、(2)大衆討議と学習を何よりも重視する活動、(3)機関紙中心の組合運動、(4)要求を基礎に組合員を結集すること、の四点を強調し、この最大の武器が中央機関紙「じかたび」であると規定した。中央機関紙を組織建設の中心にすえるという構想は全日自労の前身である全日土建の頃からのものであり、一九五三年の第八回大会で既に「中央機関紙は全国単一産業別組織確立の重要な武器である。地方に起った斗いに全組織が抗議し、全体が共闘する体制を整え、全組合員にまで全国的連帯性を自覚させ……全国の仲間の経験と交流し、戦力を養成する最良の武器である」と規定している。雇用、失対政策の新たな転換の下でこの構想は、一九五九年の第一四回大会および第一二回中央委員会で全組織的に位置づけなおされ、数年間の経験にもとづいて一九六二年の第一七回定期大会で定式化されたものであった。

## 二 北海道における「じかたび」拡大運動

北海道でこの方針の具体化が本格的に始まるのは一九六二年十月の第十一回道本定期大会以降である。それ以前の教育・宣伝活動、組織実態について一九六〇年に全日自労中央本部が行った「組織調査」が参考になる。

これによると執行委員会体制はほぼ確立し、中央→支部執行委員会の間のパイプは結ばれており、執行委員会→現場組織のパイプは半分が確立し、現場まわりなどの方法により執行委員会の方針はかなりの現場で大衆討議に付され、現場斗争が存在していたことを示している。又、教宣活動についてみると「じかたび」は約六〇〇部〜七〇〇部位で、一九五九年に提起された倍化運動



【年度毎に基準月に変動があるため若干の部数の誤差はある】

には約半分の支部が取りくんでおり、一部の支部はこれを使って学習を行っていた。次に一九六〇年以降の北海道における部数変化をみよう。

このグラフが示すように一九六〇年の六〇〇部から一九六六年の四、九三二部をピークに急速な拡大が行われており、特に六二年から六四年にかけての拡大は著しい。六二年から六三年にかけての拡大は主として農村地帯（様似、初山別、天塩、名寄、美深、美流渡）と炭鉱地帯（夕張、三笠）で行われ都市（札幌、小樽、函館、網走）が悪く室蘭、釧路の大組織は停滞を示している。その後支部内における増減の周期、支部間の不均等発展を内包しつつ全体としては拡大をたどる。どのように拡大がなされたかをいくつかの支部についてみよう。

第一二回地方委員会（一九六三年二月一〇日―一日）は「函館地区へ組織工作者の派遣について」の決定を行いいわゆる「函館オルグ」の実施を決定した。「①職場で就労又は討議の中で組織拡大をはかり職場組織の確立をはかる。②定期的に学習会を義務化する。③居住集会に参加しその組織の確立に努力する。④特に婦人部の統一とその組織活動の出来る体制をつくる。」という任務をもった八名の工作者を二月一九日から一ヶ月函館に派遣した。八名の工作者は、道本部の幹部ではなく空知地協、室蘭支部から選ばれ、工作者集団として合宿生活の中で学習、実践、方針を連日続け工作を行った。これは北海道の失対労働者の4/5以上を占める函館支部を炭鉱地帯での先進的な闘い、室蘭での未組織を組織した経験で教育しようとしたものである。この経過は「函館オルグ報告書」としてだされている。

函館の失対登録者は四、三〇〇人で組合員は一九六二年以降減りはじめ一、六〇〇人。「ウチの組合は女の組合だ」というように組合員の大部分は婦人で占められ男性は組合に非協力的で、

幹部が少いため殆んど現場にいけず現場は「酒、バクチ、エロ本」があたりまえというように荒廃しており、監督におさえつけられていた。工作者集団は前記方針に基づいてこの現場に入り一緒にトロを押し、スコップをもちながら労働者のうっ積した不満、要求、意見をひきだす。工作者集団はこの不満、要求を分析し、まずその実現の先頭にたつて具体的にちかちかとする経験を通じて組合員、労働者に信頼と自信を与え、次には労働者自ら立ちあがるよう援助し、その中で\*活動家を発掘し現場組織をつくっていった。

\* 組合の足をひっぱる先頭にたつて影の「委員長」と呼ばれていた野津氏は、一ヶ月の工作の中で積極的な組合支持者となり、他の現場にも組合加入を訴えて組織の先頭にたつようになる。このように多くの活動家が発掘され、孤立の中で悲壮な気持で組合をささえてきた婦人を立上らせた。

このオルグの成果として、組合員の増加（重点とされた中央分會では二〇〇人から七〇〇人）、「じかたび」の増加（中央分會は一〇数部から一八〇部に）、新しい活動家の誕生と職場委員会の確立（全職場の35）、組合員の確信があげられている。この後函館支部は婦人を先頭に全道の典型支部に転じていく。

続いて札幌オルグ（一九六四年一月二十五日―二月十二日）が実施された。工作者集団は、夕張、三笠、美唄、室蘭から各二名、苫小牧、小樽、釧路、網走、留萌として函館から各一名の十四名で構成され、工作者集団は札幌支部の三十二名と共にオルグ学校で講義をうけつつオルグを行うものであった。オルグ学校

は、先反綱領、戦後労働運動史、全国一律最賃制、社会のしくみとからくりのカリキュラムで四十七時間の講義が行われた。オルグの結果「じかたび」は一四〇部のバラ売りから一八〇部の固定読者二〇部のバラ売りに拡大した。このオルグでは組合員の拡大はあまりすすまなかったが、その後札幌支部が発展していく条件をつくったと評価されている。

札幌オルグに続いて、稚内オルグ、室蘭オルグ、旭川オルグが実施される。これは未組織支部、或いは方針が充分浸透しなかつたり停滞を示した支部に対し先進的経験を蓄積した支部からオルグを派遣し、全力をあげてそれを先進に転じる、その経験を典型として普及し全体を高めるという独特の方法であった。又このオルグ制度は対象支部の強化と共に参加した工作者集団の能力を高め参加支部をも強化するという役割も果たしていた。

一九六二年から一九六四年にかけての飛躍的拡大は、このような組織活動を含む矢対打切反対斗争を基礎に達成されたものであったが、一九六四年以降この量的拡大は質的向上に向い本格的な「じかたび」中心の組合活動が始まる。その典型が都市、炭鉱地帯だけでなく農村地帯にも生れてくる。以下いくつかの典型支部についてその様子をみる。

都市自労では函館オルグを契機に強化された函館支部があげられる。函館支部の起動力は、班制度による学習活動である。これは婦人によってとりくまれたもので、最初は婦人だけが班を構成していたが、一九六四年から一九六五年にかけ分會の中に班型現場をつくり、交流によって全現場・分會に急速に拡大したもので

ある。一班は一〇名構成で、班長は一ヶ月交代で必ず全員が班長になり、班が署名、カンパ、一じかたび」読み合いなど行動と学習の基礎単位とされた。班制度のねらいを支部では「これからは組合役員だけでなく、全員組合の仕事をしなければなりません。そのため班づくりが必要（『週刊自労』一九六四年十月）としている。この班制度により個人の積極性が発揮され、いまままで執行部のつかめなかつた要求、感情が明らかにされ、「一じかたび」拡大（一九六四年五〇〇部―六五年六二〇部）、組合員拡大（中央分会の場合一九六三年五〇八人―六四年七〇三人）がすすめられた。この班制度は典型として評価され小樽をはじめ全道の支部に普及していく。

炭鉱地帯では夕張支部をとりあげる。夕張においては一九六一年まで「じかたび」は資料として職場委員に配られている程度であり、個人有料購読制の決定を不安ととまごいの中で行った。

一九六二年から六四年にかけて飛躍的拡大は一九六二年から六三年にかけて全組織あげての失対打切り反対斗争及び「失反綱

〔夕張支部における「じかたび」購読者数の変化〕

年	1960年	1962年	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年
部数	30	162	420	670	680	630	630	630	630

夕張における失対適格者は1960年303人以降64年の583人を頂点に漸減、組合員は1960年の303人から1965年まで漸増、以下1969年の435人に漸減

領」にもとずき斗かわれ全国的な典型とされた求職者斗争の中で行われたものである。連日にわたる現場監督、職安、自治体との交渉と斗争、地域の有権者の過半数をこえる署名活動（一九六四年末―一九六三年二月の間に有権者五六、七八六人中、三三、六六七人の署名をとっている）、地域の要求、特に無権利、貧困者の組織活動は「ここ一年間の斗いで組合員の……行動性を昂め活動家の質と量と共に増大させ、地域要求をとりあげこれを前進させ各地共斗を発展させる中で、六月七日の地区労総会では……安保共斗発足を決定……全組合員による署名活力に依り炭鉱労働者、農民、一般住民への影響を広めた。」（夕張支部第一九回執行委員会議案―一九六三年七月）と総括されている。このように全組合員が動くことを保障する武器としての「じかたび」の拡大が組織内で進行したのである。一方組織外における拡大は求職部会、生活保護部会、老人部会、農民部会など「失反綱領」に基づいてつくられた組織において行われている。求職部会は「失対登録を認めない」という改悪二法に対置して「一人の組合員が一人の求職者を組織しよう」のスローガンの下につくられたもので、一九六三年十一月には一五〇名、十二月には二〇〇名を越える人数を組織し、一年にわたり話し合い、学習、職安行動の結果、二法改定以来全国に先がけ登録を認めさせ、求職斗争の全国的な嚆矢となった。生活保護部会は一九六三年七月四二五名、十二月五〇〇名突破と、地域の生活困窮者四〇〇〇〜五〇〇〇名を組織していた。一九六四年頃には失対労働者以外のこれらの失業者、貧困者、未組織者の中に「じかたび」は購読者をもちその斗いの「テキスト」

にされていった。この場合、機関紙をとり読むという事的前提に世話役活動、斗争を先行させ、切実な要求に応えた具体的成果を實現する事により信頼関係をつくることがある。求職斗争の結果失対登録を實現した求職者はこのことを次のように言っている。

「……主人が死んで……手の悪い子供をかかえ、どうにもならなくなつて死のうと思つていたところを失対の仲間にお助けられました。……「じかたび」は、はじめ隣の人たちが読んでいたのを聞いたり、読ましてもらつたりしていたけれど、はじめのころは、仲間のことがよくかいてあるくらいにしか思つていませんでした。だけど組合活動は「じかたび」を中心にするのだといふので、そんな大変なものならと、はじめは帰つてからカン字など字引をめぐつて読んだものです。いまでは読むだけでなく、大事などころはとっておきます。なかには本当によめない人でも、組合のためならとつている人もいます。帰つてから子供に読んでもらうんだそうです。」(小樽支部機関紙に掲載された夕張支部石郷岡さんの話し)

「昭夫は不具者のためどこでもやとつてくれませんでした。……このたび組合の人のすすめで職安がよいをしましたがおかげで失対に入れることになりこんなうれしいことは生れてはじめてです。全日自労ほど貧乏人や身体障害者のためにたたかつてくれる人はないと、つくづく思いました。こんごも一家をあげてこの斗いに参加させてもらいます。」(新井氏母親談、「じかたび」一九六四年七月一三日第四五〇号)

自分の要求と地域の要求を結合し、統一行動、統一戦線の力で

斗うことを基本方針にしてきた全日自労の斗いは、地域的、全国的な低賃金、無権利底上げの条件を作りつつあった。夕張では一九六四年冬期の失対賃金は男五八六円、女五六六円であったのに対し、A建設は男五〇〇円、女三二〇円、B建設は男四五〇円、C炭鉱は男五〇〇円、女三二〇円という状態で「全日自労の求職斗争の斗いの中で北夕(北炭夕張)の会社側では、主婦達が失対手続をやり来なくなつたので今迄婦人労働者の単価二八〇円だったのを三二〇円とし健康保険と失業保険もつけるから是非来てくれと云いだし、平和鉱では七時から三時迄で五〇〇円にする」と発表、某土建業者は「このままだと労働者をみんな全日自労にとられてしまう」と職安に抗議する一方、「今年には賃金を上げないと労働者が集まらない」と云いだす(夕張支部執行委員会、一九六四年一月二〇日)状態が生れていた。「労働者階級中の貴族から嘲笑される存在」でまつたくなつたわけではないが「小学校もろくに出不いなかで年とつてから……新聞や本を読み、ノートをとり、記事を書き、ガリを書いたり、ニュースやピラを出し署名活動や大衆的交渉や各種の集会等、警察の弾圧の中でどの組合よりも多くの犠牲を払つて働いてきました。そうして『全日自労にとつて一番うれしいのは、なんとか生活出来る様になつたと云うこともあるが、何んといつても人並に扱つて貰つた事です』と或る婦人が云つた様に最初は市役所や戸別訪問に入るのに足がふるえたのが、今は監督も課長も市長も対等に交渉出来る様になり、逆に考え方ではそうした人達よりずっと正しい、立派なものをもつことが出来、日本中の模範になる労働組合である全日自労

をつくりあげて来ました。」(夕張支部執行委員会、一九六五年四月六日)という自負をもち「地区労への加入を拒否しつづけられたり、一〇年前、アブレ反対で市役所へおしかけたとき、地区労議長に解散を命令された」屈辱を「モンダイは実力であります。」(共斗部総括、一九六四年八月)とふりかえれる成長をたどってきた。夕張支部を訪れ交流した小樽支部の組合員は次のように書いている。

「実際に感心したのは、各分会の人たちが進んで何か組合の仕事をしているということでした。……清水沢中央分会では、動員参加をよびかけるピラを役員でないおばさん三人が相談して書いていました。『成功の功は、力のように頭がでるのかどうだったか……』と相談しているのです。『……せうでいいのかしら、今の子どもの本は、しょうとなくなっているんじゃない……』と書いている……。自分たちの力をつくって、市民に呼びかけるピラです。……原稿も、ガリ切りも、印刷も皆組合員がやっているのです。……石郷岡さん……のようなおばさんはどの分会にも沢山いました。」(小樽支部機関紙「仲間」一三四号)

組合運動、教宣活動の転換は、まず組合の中でおくれているといわれていた婦人が変り、全体を変えろという構造をもって推移したが、組合の中で多くを占める老人もその歩みを共にしている。

大夕張分会は二八人全員が六五才以上の老人で構成されているが、「じかたび」の読み合い学習を行うのみならず、ガリ切りをならぬ職場新聞の発行まで行っている。まわりの組合が非協力的

北海道における就労者の年令構成  
(1967年3月道本部調査、)  
(17支部1,891人)

男		年 令	女	
比率	人数		人数	比率
8	70	70 以上	2	1
42	358	60 ~ 69	135	12
27	231	50 ~ 59	443	40
16	132	40 ~ 49	411	39
7	63	30 ~ 39	92	9
—	2	20 ~ 29	2	—
55.9		平均年令	48.5	

(平均年令は年々高まっている。全国平均は1964年の51.8才から年1才づつ高まり、1968年には55.4才となっている。)

で「自労の署名に応ずるな」と放送塔まで使って妨害する中を一軒一軒たづね全員で署名活動を行っている。  
ここに「じかたび」中心の組合活動の成果の一端をみる事ができる。

農村自労の典型として美深支部があげられる。美深支部は五七年頃役員だけの組合となり、崩壊したあと六一年に再建されたもので、前の経験を反省し大量の活動家をつくるため団交、会議に交代で出席するという方針をたて、六三年からは機関紙中心の活動にとりくむ。一九六五年の支部大会の総括として、大部分が「じかたび」をとりその読み合いを行うようになった、としながらも、教宣活動のゆきづまりと外部教宣の必要が指摘され「じかたび全員購読制」と「活動組織(五人組など)結成」の決議を行

っている。この時登録者は三一人、組合員二五人に対し六〇部の「じかたび」が入っており、ここでは字の読めなくとも購読し、家族や友人に読んでもらうという者も含め、失対労働者二七部、地域住民、民間労働者に三三部の内訳となっている。

「じかたび」中心の組合運動の典型を創造し、その起動力になったのは婦人であった。一九六二年以降になると全国の先進支部となった夕張をはじめどの支部も共通して婦人が組合運動の中心になっていることを指摘している。

「……私、失対にて一六年初めての大きな斗いでした。今迄は幹部の方に頼りすぎ、自分の力、団結の力、頑張りを見出すことのできなかつた女性群も、山科様（道本部副委員長）やオルグの皆様が先頭に行動を共にし幾つかの要求をかちとることができましたうれしさ、いまさらながら感懐にひたって居ります。男性の方でも女性の話しにかたむいてきましたから、これからは男女共に集会を開いてお互いに意見を交換し強い全日自労となり……」（稚内オルグに対する稚内支部より道本部への礼状）

「……婦人部は仲間を中心となって斗いに参加してまいりました。運営、長計の斗いの中で婦人が中心になって賃金カットされながら仲間全体の斗いを発展させ……弁天分会、中央分会の組織づくり、カンバ未納追放……」（一九六四年函館支部大会決定書）

「……社会的圧迫のなかで、従来全体の立場、社会的立場にたち、ものごとを階級的組織的に行うことが中々できないといわれてきましたが、最近逆に行動の面では組合の中心的役割を果たすまでになっています。」（一九六二年道定期大会決定）

「……全日自労はこれら労働者への戦線を伸ばかえすための器箱、カンバ、伝單はゆなど戦争に反対し失業と貧乏をなくし地域労働者をふくめた生活案定の中心闘争をしてくれました。しかしこれらほとんどが婦人によってなしたと評られているのです。」（一九六五年、同決定）

かつて婦人は、「……生活が若しくて、勉強できなくて、自分たち独自でいろいろやる能力がないので、組合費だけでも真面目におさめて、組合の人（男子）にやってもらおうとする依存心がある。」個人的な感情、利益が先になり、全体の立場、社会的立場に立えず、物事を組織的に行う点に欠けている。（一九五九年道本部婦人部報告）と特徴づけられておりその対策として「(a)話し合いの機会を多くもつ、(b)話し合いの中で要求を明らかにしていくこと……、(c)いまだにプリントを読んだり、会議に出たりして筆記したりする点が欠けており、今迄の耳学問から目の学問を合せていくこと。(d)監督は「偉い」「強い」「いい監督だ」という考え……監督に先にお茶を入れたり、机に花をたてたり、こうした考えをやめて……斗う中でみんな力を合せれば要求も通るし職場も明るくなり、安心して働けることを体験させることが必要である。……(e)種々の会合に出席したり、他団体との交流が進んでいるが、これを役員だけでなく、全体のものとする様努力すること。苦勞しているのは自分一人ではない、世間には同じよう他人が派曲していること……婦人として、母親として、労働者として解放の斗いをすすめる。」（一九五九年道本部報告）とされている。安部斗争を中心とする共闘、統一行動、交流は全日自労が



「企業主義的」、閉鎖的組合の体質を転換させ組合員の認識を飛躍させたことは次のように総括されている。

「失業という人間としての最高の苦情をなめさせているのは、日本の国民をたましこんでいる自民党池田の一派とアメリカの反動支配層であることが安保斗争の尊い経験を通じてつかむことができました。従って私たちの苦しみと国民全体の苦しみは全く共通なものであり、私たちがこのことに深い理解をもって大胆に闘うならば、決して敵の「なまけ者」「ドロボー」の逆宣伝をフンサイできるといふことです。」(一九六〇年定期大会決定)

この認識の飛躍は失対労働者の中でも差別され下積みになっていた婦人には二乗してあらわれた。婦人は集会、会議に参加し、話し、字を眺み書く習慣をつけることから始めて「……私たちが子供に残すものは金や財産ではない。どうしたら失業も貧乏もなくなる社会を作ろうかという以外にはないし、そのためにはつらくたって、苦しくたって勉強しなくてはならない。そしていまは解らない高度な理論ばかりみんなが発言するし、むずかしいが、だれがやるでもなし、私たちが自身がやるという気がまえがなくては……。」(一九六四年、道定期大会婦人部分科会のまとめ)と学習の必要を認識し学ぶことを始めた。北大の労働問題研究会が夕張支部のルポルターージュを「ボタ山のすそに生きている」にまとめたが、その中で「分会の婦人部長のおぼさんの本だには『資本論』まであった」と驚ろきの報告をしている。

### 三 教宣学校、組合大学の開設

全日自労北海道支部の教宣学校(他の組合の労働講座に相当)は一九六四年に始まる。第一四回道定期大会(一九六四年十月)は組合活動の幹部育成を目的として教宣学校の開設を決定し、一年間に全道一五ヶ所(札幌、豊平、登別、増毛、岩内、室蘭、美唄、留萌、名寄、網走、釧路、小樽、函館…)で実施した。これは二日から三日間にわたるもので対象は支部、分会の活動家を中心で、内容は「全日自労綱領」を中心とし、講師は道本部・支部の役員がなっている。室蘭地区のカリキュラムが示すように他の組合の労働講座とは可成り様相を異にし、活動者会議と「学校」(講座)が未分化の状態にあるといえよう。

#### 室蘭地区教宣学校カリキュラム

##### 第一日

一〇:〇〇～一〇:三〇 中央、道の斗争報告

一一:〇〇～一三:〇〇 質問

一三:〇〇～一四:〇〇 二十三回中央委員会決定の実践と指令三号の消化について

一三:三〇～一五:〇〇 質問

一五:三〇～一六:〇〇 全日自労綱領の具体化について

① 話し合う活動

② 生活記録をつくる活動

##### 第二日

一六:〇〇～一〇:三〇 「じかたび」中心の組合活動強化について

一〇三〇～一〇三〇 支部・分会活動状況報告

一〇三〇～一〇三〇 書き手をふやす活動と実践について

一〇三〇～一〇三〇 夕張の求職斗争「前進する失業者の斗い」

(幻燈)

一五〇〇～一六〇〇 感想文作成

一六〇〇～一七〇〇 まとめ

夕張支部では一九六五年から「組合大学」を創設する。「……この大学は……労働者階級としての自覚と任務を知り、全日自労の失反綱領の立場にたち、夕張の失業者、低所得層、貧困者の中における組合の役割、その中核指導者を養い、情勢をもっと有利にするために、即ち選挙後の歴史的転換を指導し得る幹部を教育する」ことを目的としたもので、各分会から二名づつ、一二名が入学した。これへの出席者は分会で討議して決定され一ヶ月間その任務に限定することが指示されている。全課程は四〇時間（毎週水・土曜日の九時～五時）で、内容は「労働者階級の任務と展望」、「労働者のものの見方と考え方」、「全日自労の歴史と失反綱領（史的唯物論）」、「夕張の情勢と方向」、「階級的民主的労働組合とは」、「記事の書き方、教宣について」、「福祉地域への工作」

（実践課題）、「総括、卒業式」となっている。「賃労働と資本」「共産党宣言」が参考文献としてあげられている。

このように他の組合とは一〇数年遅れて教宣学校の開設が行われたのであるが、一つには一九六四年頃から道の運動全体が壁につきあたり、その対応策として幹部の教育が要求されたという事情があった。失対打切り政策の強化は「いままでただ要求だけ出

せば、職場で斗いさえすればとれるとの考えは……慎重に検討しなければなりません。今までのやり方では一つのカベに打ち当り統一戦線の力を強めることなしにテキを打破ことが出来ない……」（一九六四年二月二十七日、夕張支部執行委員会決定）というように運動の根本的転換なしには対応を許さないきびしさをもって迫ってきた。また、失対労働者、組合員に対する「じかたび」購読者数の比率は年々上昇し、一九六四年頃にはかなりの支部で「読み合い、話し合い」に指導の重点をおくようになっており、一般組合員の行動意欲、学習意欲や意識、思想の昂揚がみられたが、幹部がこれを指導しきれず立遅れるという問題がこころはじめていた。

函館支部の一九六四年の総括は「……斗いは非常にねばり強く一歩も引下らない構えを貫いてきた。……幹部依存、請負の姿勢がちくじ解決され始めてきた」という一般組合員の成長に対し「決定的に学習が不足している。要求斗争が質的に高まらない、中堅幹部の不足などが目立ちます。斗争の職人時代はすぎたといわれただけに、学習を深め……ること、指導性を身につけることが急務となっています。」と幹部の立ち遅れを指摘している。釧路、三笠、夕張、美唄、美深等大部分の支部が六四年度の総括として同様の指摘をしている。

幹部を中心とする学習体制の強化はこのように失対内部からと同時に失反綱領にもとづく未組織、貧困者の組織化の任務を遂行する中からも強く自覚されたものである。夕張支部を中心に空知地協では小零細企業、地域困窮者の組織、農民との交流（田植え

桶刈りに班編成を行い共に働きながら署名、座談会、要求調査)を行っており、函館、室蘭では港湾労働者の組織化に着手していた。また農民との交流は「農村オルグ」「農村学校」という形でなされている。これは農業構造改善政策に加えて冷害によってうちひがれていった十勝、道北地方を対象に、各支部から派遣されたオルグが自ら「農村学校」で講義をうけながら未組織、未知の農民を訪ね要求をひきだし組織することを目的としたものであった。十勝オルグ(一九六三年二月十六日〜二十六日)を例にとるとオルグ団は小樽、函館、釧路、美唄、網走、夕張、白糠、道本部より九名で構成し、農村学校で一五時間の講義を受け、未知の農民を一人一人たずね、生活保護をとる援助、借金の相談を行い、要求をきき、一部分農村労働組合に組織している。これに続いて六四年には美瑛、名寄で実施されている。このオルグは労農同盟の端緒をつくりあげたと総括され、「未組織の労働者、農民は、今日の経済情勢の中で、……指導者を求めております。それは理論的に高まり行動力をおしまない労働者階級であります。従ってわれわれは、常にはげしい情勢の変化にも、立場と理論とを明確にしておかねばなりません。……我々の行動は何もない所へいくことが今後特に多くなります。……真の要求を引出すために訪問し、一対一で話し合うことが大切です。そして基本的な学習が準備されていなければなりません。」(「農村オルグ報告書」、道本部発行「組織と調査」第二四号、一九六三年三月二十五日)と理論水準上の必要を指摘している。

六四年頃に共通してつきあった壁とは、失反綱領の路線に基

づく運動の発展途上で経験主義的な指導のゆきつまりが顕在化させられたもので、ここから「じかたび」学習から分化した一定の教育体系の創設が必要とされたのである。夕張支部では、幹部に要求される能力として「自ら地域の情勢を分析し、自ら具体的な方針をたて、自ら斗いを組織し、この中で活動家と組織の拡大強化をはかっていく、その時々々の問題を報告し、討論を組織すること、又学習会を自ら組織し指導できるようにすること」を求め、そのため最近学習すべきものとして「失反綱領」、「労働者階級の任務と展望」、「もの見方考え方」、「労働組合の理論と実務」、「現在の賃金理論とわれわれの賃金」、「社会保障」、「婦人運動、農民運動」、「じかたび」、「全日自労の各級機関の諸方針と諸決定」、「各単産の機関紙」、「市勢要覧」、「広報ゆうばり」、「商業新聞夕張版」、「賃労働と資本」、「国家と革命」、「弁証法について」をあげている。

#### 四 一九六〇年代後半の若干の特徴

一九六六年以降の教宣活動の特徴として、一九六六年を頂点に「じかたび」購読者数がゆるやかな下降カーブを描きはじめたこと、幹部学校、労働学校等の教育体制の強化の二つをあげることができる。

##### (1) 「じかたび」購読者数の下降傾向

一九六六年五月には「じかたび」中心の現場での読み合い話し合いが全道的に進められる中で拡大が大きく前進(一九九回地方委員会)という状態であったが、一九六六年一四、九〇七部、一九

六七年―四、七六八部、一九六八年―四、七〇二部、一九六九年四、七四九部とそれ以降漸減、停滞状態が続いている。この原因は二つの面から考えることができる。

一九六三年の「失対法、職安法改正」、一九六六年の「雇用対策法」等の失対打ち切り政策は、全日自労の総力あげての反対運動により当初構想したテンポを大中に遅らせつつも、じりじりと失対労働者をしめつけてきた。沼田、俱知安、月形、中川、熊石、三石、板幸、池田、上湧別、幌延、礼文等組合のない失対、弱い失対では一九六五年から六七年にかけて続々と打ち切りが行なわれている。また一九六四年後半以降、職業安定所は失対登録者を一人も認めず不認定にし、夕張につづき各地でもりあがりつつあった一五〇〇人にのぼる求職者斗争への攻撃をはじめたが、三三二号通達「中高年令失業者等就職促進措置の業務について」（一九六七年六月）および三三五号通達「公共職業安定所における集団陳情の取扱について」（一九六七年六月）以降は警察官導入をもつて弾圧するに至った。一九六五年以後求職斗争は壁にぶつかり、敵の攻撃ははげしく、多くの支部で失敗をかさねてまいりました。（二十三回地方委員会、一九六八年六月）と総括せざるをえない事態になっていた。この結果、失対登録者、組合員の年毎減少の幅は大きくなっていく。

一方、主体的な問題として、第二十二回地方委員会（一九六八年一月）は次のことを指摘している。

① 各級執行委員会か「じかたび」を中心に機関として読みあい討議をふかめ、確信をもって「じかたび」中心の教育、宣伝の

年	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
失対登録者数 (3月)	17,928	16,299	14,618	13,489	12,600	11,718	10,914	9,042
組合費納入数 (10月)	9,006	8,700	9,000	9,000	7,221	7,220	6,410	6,141
じかたび部数	1,448	3,407	4,664	4,868	4,932	4,768	4,702	4,749

（組合員数は失対の場合移動が激しいので正確にとらえ難いが、約組合費納入者× $\frac{5}{4}$ 位である。）

指導をする点で不充分さがあ  
る。

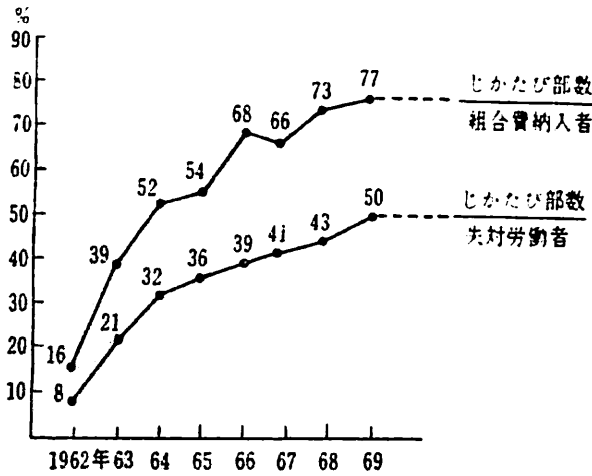
② 現場で読み合う活動の姿勢と体制が弱められ固定読者の変動がはげしく都市ではバラ売りの傾向が目立ってきた。

③ 「三分化」攻撃や分裂攻撃、民間転出や出稼ぎのため配布網が不安定になっている。

④ 文字の読めない労働者が半数以上いるが、彼らが読み合う活動からはづされ購読をやめていつている。

一九六六年末から減紙傾向にあった「じかたび」は、六八年二月以降若干の増紙に転じていく。一九六八年には江別、夕張、滝川、原井江、砂川、苫小牧、美瑛、斜里、幕別、岩見沢、豊平の各支部が全員購読者になり「清水沢（夕張）のなかまが（じかたびにのつた）第四十五回中央委員会の決定を……しんぶんぜんぶにカナをふつた」「明日が私の読むばんだ

と思うと夜もねられなかった。(二十三回地方委員会、一九六八年六月)というふうな読み合ひ活動の可成りの定着と「じかたび」を中心とする組合運動が重視され、現在ではほとんどの職場委員会が「じかたび」が選出されております。(第十九回定期大会、一九六九年)と「じかたび」運動の体制が整いつつあることを確認している。前表が示すように「じかたび」一部数の減少はあるが対登録者比、組合員比は年々高まってきており、現在全国八万五千部目



標に込え「失対者労働者二人に一部、建設労働者一人」を一部の「じかたび」を目標に拡大運動、読み合ひ話し合い運動がすすめられてい

(2) 教育体系の強化

国家機構を媒介にした独占資本の労働力流動化政策、失対打切り政策が一段と強化され、強圧的になってき

た六〇年代の後半、全日自労は夕張にみられるように全日自労綱領にもとづく「失業と貧困」を日本から根絶するという目標を組合の階級的民主的強化、統一線戦の力によって実現するという運動路線をより鮮明にしこれに対置してきた。しかしながら「われわれの斗いは、三八年当時で足踏み」(第十七回定期大会、一九六七年)をし求職斗争を「敵の攻撃がきびしく、多くの支部で失敗をかさねてまいりました」(二十三回地方委員会)というように六〇年代後半の全日自労の運動には未踏の地を切り拓く途上で、既に一九六四、五年頃から指摘されていた経歴主義の克服は緊要の課題であり階級的教育活動の強調が行われてくる。第十八回定期大会は階級的教育活動を重視する理由として、「①現場の活動家の層が五〇代、六〇代の仲間や婦人の仲間が中心になりつつあること、②建設労働者が新しく組織されてきているが、労働者としての初歩的な教育をうけておらず、また建設分会のなかの幹部を育成することが急務となっていること。③「失対打切り」を完全に粉碎し求職斗争の前進のため、大量の組織部員と求職者自身のなかでの活動家を育てていかなければならぬ」ということをあげている。

夕張支部の一九六七年三月の第七回執行委員会は「大部いろいろのものを読み、書く様になりましたが、成程ということだけで方針がでません。活動家は多いが幹部が中々生れませんが」(傍点引用者)と婦人を評価しているが、ここには、「じかたび」運動の一定の発展段階における成果(大量の活動家の誕生)とその限界

(幹部を育成できない)を如実に示している。「じかたび」運動はこの期、読み合い、話し合いを最重点にしていたが「みんなて読み合うなかで『字をききにくる』『自分の番の前日は何回もよみ、ふりがなをふる』『お互いが助け合う』よみあうなかで重要記事について説明をすると理解が深まるが、このためには幹部自身の普断の諸決定や文献の学習が必要であることが判った。」(夕張支部執行委員会、一九六八年六月)というように大衆的学習運動が中堅幹部の理論的思想的水準の向上なしには進展しない段階にきていた。

このような課題に因應るべく中央幹部学校、労働学校の開設が実施された。第一回の中央労働学校は一九六六年三月一日から四日間各支部の委員長を対象に、「全日自労中央幹部学校テキスト」(全日自労中央機関誌「学習」二四号)を使用して実施され、この年より各支部で分会長、班長を対象に労働学校が開設されるようになる。一九六九年には、全体が四課からなる労働学校用のテキストが作成された。

#### 「働くものの方・考え方」

- 一、人間とはなにか。二、社会のしくみのもとにあるもの。
- 三、土台と上部構造。四、階級のわかれた社会。五、国家と革命。六、これからの社会——社会主義と共産主義。七、歴史をつくり動かす力——人民大衆。

#### 「資本主義経済のしくみ」

- 一、賃金とはなにか。二、「ひきあう賃金」とはどれだけか。
- 三、労働者は搾取されているか。四、資本家はどんな方法で

搾取をつよめるか、五、賃金形態を搾取をつよめる道具である。六、労働者階級が資本家階級をやしなっている。七、資本家階級の富はふえ、労働者階級の苦しみは大きくなる。八、恐慌とはなにか、なぜおこるか。九、独占資本主義、帝国主義とはなにか。十、資本主義の全般的危機。

「はじめて労働組合運動をまなぶために」

- 労働者と労働組合運動について——一、労働者と労働組合、二、わが国の労働組合運動史の概要。三、その現状と問題点。

労働組合運動の実際活動について——一、労働組合運動の三つの土台。二、労働組合運動での三つの(経済、政治、思想)基本的な関係。三、労働戦線の真の統一をかちとるために。四、失業反対のたたかい。

「安保と統一戦線について」

- 一、安保をめぐる情勢について。二、統一戦線について。

これらの学校の講師は、労働者教育協会講師、大学教官、全日自労道本部、支部役員、他労組役員となっている。

一九六五年の末頃から名寄、美唄において大工、左官などの日雇建設労働者の日雇健康保健の適用という要求で全日自労の中に建設分会の組織化が全国に先が行われたが、これは急速に他支部に波及し、失対労働者に比する数におよぶ。(一九六六年——二分會、一七二〇人、六七年——四分會、三、一〇二人、六八年——七分會、五、四二四人)これらの労働者としての訓練をうけていない労働組合の「初年兵」に初歩的な教育を与えたために労働組

合論、賃金論のABCを内容とした労働学校の開設が各地で行われた。一九六七年には美深、美唄、札幌、釧路、小樽で二二〇人を対象に、六八年には前年に加え長万部で。

このように六〇年代後半には「じかたび学習」から明確に分化した教育制度の強化が意識的にはかられた。現在、「じかたびによる大衆的学習」——「幹部、活動家対象の労働学校」とならんで、「一般組合員を対象とした「教育制度」の構想も模索されつつある。